聞名仏教

第 172 号　　毎月発行
（発行日）2025 年 1 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
http://nenbutsuji.info/
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行（ドイノリアキ）
記号 17810　番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

孫の世話でもせよ

佐々木蓮麿

ある日のこと、一人の同行が寺に参りまして、「ご院主さん、私は永年お寺に参って仏法を聴聞しているのですが、どうも後生に安心ができないので困っております。どうしたならば、後生に安心ができるでしょうか」と尋ねますので、私はその同行に申しました。「お婆さん、そんなことを聞いて歩く暇があったら、早く家に帰って孫の世話でもするがよろしかろう」と。

すると、今の同行は合点が行かぬような顔つきで「どうしてそんなことをおっしゃるのですか」と反問しますので、私はその同行に申しました。

「あなたも私も凡夫です、凡夫というものは、一寸先は闇です。後生のことを考える力も、資格もありません。わかり易く申せば、あなたも私も、後生と踏み出したならば盲目です。盲目同士が話し合うても駄目ですから、凡夫の力でできる孫の世話や、庭の草むしりでも一生けんめいにした方が気がきいている」と申しました。

ところが、そのお婆さんはびっくりしたような顔つきで「ご院主さん、私は全く方向違いの聞きようをしておりました。後生のことは凡夫の計らうべきところではないから、一切如来の他力におまかせして、専ら念仏せよ、と耳にタコのできるほど聞きながら、いつのまにか、また後生に手を出していたのでありました。これからは、その点をよく心得て念仏します」と言いますから、「お婆さん――それでは駄目だ、これからは心得るなどということが大きなウヌボレです。蓮如上人は『心得たと思うは心得ぬなり、心得ぬと思うは心得たるなり』と仰せられて、人間、即ち凡夫というものは何事によらず本当に心得るということはできないのです。一時は心得たと思うても、やがては心得られぬようになるのが間違いのないところですから、自分の心にとり合わず、今ここで出来る口称の念仏を喜び、凡夫の力でできる孫の世話や庭の草むしりでもしておればよいのです」と申しましたところ、お婆さんは再び念を押すことなく「ありがとうございます」と言って、念仏しながら帰りました。

ここであります。他力の念仏をいただくということは、別に変わったことでも、また、むつかしいことでもありません。人間として無理のない、あたりまえの生活に出させてもらいことです。人間の精神的苦悩は、すべて生活の無理からくるようです。つまり人間の力のほどが分からないため、力以上のところに手を出して苦しむのであります。そこで「救われる」ということは、人間の力のほどをよく知らせてもらって力相応の生活をし、力以上のところはナムアミダブツと如来の他力におまかせして、自力の手を出さぬことです。

今の同行は、初めに後生の問題に手を出して苦しんでいましたが、これは人力の及ばぬところであるから、すべてを如来の他力に任せて念仏するほかはないと聞いて、一応は後生の問題から手を引いたものの「これから心得ます」と言って第二の間違いを犯している、即ち人間の心というものを信頼し過ぎているのです。

人間の心は動き通し、変り通しですから「心得ます」と言っても、あてにはなりません。人間の真実を見定めたものは、未来にも過去にも手を出さず、また人間の心もあてにせず、すべてを如来の他力に打ち任せて〈念仏して〉いま、自分に与えられている仕事に専念するのみであります。「眼前の一事これ一切」とでもいうべきところでしょう。

（了）

対話編『浄土真宗』⑱

A「今までは真宗の教義から言いますと浄土に生まれていく道、いわゆる往相のことをお話しました。もう一つ真宗では還相ということを申します」

B「還相とは」

A「浄土から迷いの世界に還ってきて他の衆生を救うはたらきをすることです」

B「どういうはたらきですか」

A「還相については三つぐらいの意味があると解釈されています。一つは、私に、浄土に生まれる道を教えてお導きくださった方は浄土から還相してくださった菩薩であるという意味です。たとえば親鸞聖人の大善知識であった法然聖人は聖人にとって還相の菩薩と受けとられています。そういう場合の還相です。もう一つは往相の道を歩む人の姿は、他の人にとって還相のはたらきをおのずからしてくださっているという還相の理解です」

B「往相の道を歩んでお念仏を喜んでいる人の生活は、周りの人におのずから往生浄土の道をお勧めするはたらきになっている。いわば往相が他の人への還相のはたらきになるという意義があるのですね。では三つ目の還相の意味は何ですか」

A「これは聖人にとって大変大事に見ておられる還相の意義だと思います。それは、私たちが浄土に生まれると、浄土に留まらないで、還相の菩薩になって迷いの境界に赴いて有縁の方から一切衆生にまで無窮に救いのはたらきをし続けていくことです」

B「親鸞聖人はこの還相のはたらきを非常に大切に考えておられるのですね」

A「ええそうです。そのきっかけは聖人の息子の善鸞は聖人の教えを受け取れず、そればかりか関東のお同行を迷わせることになったのです。それは善鸞がアミダ仏の救いを正しく受け取らず、自身が迷うどころか他の人までも迷わせていくことになった。その息子の善鸞をこの世で救いに導くことができなかったという親としての責任を聖人は感じられ、どうしたら善鸞が救われるのであろうかという課題が聖人にあったのでしょう。それだけでなく、この世でアミダ仏の救いを聞かなかった人、聞いても受け入れることができなかった多くの人たちは一体どうなるのであろうかという問題を持っておられたのでしょう」

B「ではこの問題に聖人はどう答えを見出されたのでしょうか」

A「それは、自分がこの世を終えて浄土に生まれたならば、息子を導き他の人たちを救いに導く、そういうはたらきをかぎりなくアミダ仏はさせてくださる。それを誓ってくださったのがアミダ仏の四十八願の中の第二十二願であると受け取られています」

B「自分は浄土に生まれる道を歩んでいるが、周りの人はかならずしもそうはなっていない。自分の救いがどこにあるかに気がつかないで人生を送っていて、一向に自分の救いを求めようともしない。救いを知らない人、求めても救いを得られない人がいます。そういう多くの人々がいる中で、自分だけが救われればそれでよいわけはない、共に救われていかねばならない、という課題を聖人は持っておられたのですね」

A「そう思います。自分は救われても家族ばかりか他の多くの人はそうなっていないという課題があります」

B「そこに聖人は第二十二願に深い仏の大慈悲のお心を感じられたのですね」

A「ええ、そういう悲しみや嘆きを法蔵菩薩はすでに知っていてくださって、浄土に生まれた者は、迷いの世界に還って有縁の衆生ばかりか他の無数の衆生を救う為に活動し続けるという還相のはたらきをさせたいと願われ、第二十二願にそういうはたらきをなすことができるようにと誓われ、往相ばかりか還相のはたらきをする徳を成就されたのです」

B「還相して衆生救済のはたらきをすることができるのはなぜですか」

A「法蔵菩薩の時にこうした願いを起こし、これを成就しなければ私は仏にならないと誓って長い間の修行によってそれを成就してすでに仏になっておられるからです。これによって浄土に生まれて迷いの世界に還って衆生救済のはたらきをすることができる功徳がアミダ仏によってあたえられるからです」

B「こういう事はどこで分かりますか」

A「それは仏説無量寿経に釈迦牟尼仏が説かれていることによって知らされるのです」

B「ということは私たちには実証的には分からないのではないですか」

A「ええ分かりません。ただ釈迦牟尼仏の仏語を信じるばかりです。凡夫の知性や感性ではとても経験的に知れるものではありません。私たちは

〈仏語に虚妄なし〉といわれるように、この還相のはたらきを説かれた仏語にウソはないと信じているのです。私も分からないのですから他の人がそれは信じられないと言っても無理はありません。ただ私は仏語の通りを受けてれているだけですが、それだけで有り難いです。浄土に生まれたら、それは実際的に分かるのでしょう。親鸞聖人が〈**安養にいたりてさとるべし**〉といわれるように安養浄土に至れば分かるのでしょう」

B「なるほど自分の知性には分からないけれども、悟りを開かれた仏陀の仰せだから、それを間違いないと受け入れることはできるのですね」

A「ええそうです。ですから死して浄土に生まれて還相することについては仏説に依って申し上げているのです。ただ凡夫の私たちには実証的には分かりませんが、浄土に生まれて仏にならせていただけるということは、仏は大慈大悲の徳を成就したお方ですから、大慈悲の必然として、他の苦しみ悩む衆生を救うはたらきをし続けるはずです」

B「そうですね。それでなくてはただ個人の安楽のために浄土に生まれるだけのことですからね」

A「仏になるのは自分の救いだけのためではなく、もっと大きな願いのためです」

B「どういう願いですか」

A「いわゆる〈衆生無辺誓願度〉すなわち衆生をかぎりなく済度しようという誓願に生きるために浄土に生まれるのです。こういう誓願の菩薩にしたいというのがアミダ仏の本願の究極の目的なのです。そして、その具体的なすがたが還相の菩薩のはたらきとして展開されるといえるのでしょう」

B「浄土は救われていく者の終着点ではなくて、さらに他を救うはたらきをなす出発点でもあるのですね」

A「ええ、往相はおのずから還相に連なっていくのです。ですから聖人はご和讃に、

南無阿弥陀仏の回向の
恩徳広大不思議にて
往相回向の利益には
還相回向に回入せり

と仰せられ、衆生を往相し還相せしめるお徳が南無阿弥陀仏の中に入っていて、それをアミダ仏は私たちに与えてくださり、この功徳をいただいた者は浄土に生まれ、さらに還相して衆生救済にかぎりなくたずさわっていくのだと仰せられています」

B「阿弥陀仏の本願はそれほどまでに深く広い願いであり力であり、それが今南無阿弥陀仏として私に届けられているのですね」

A「以上で我が身が救われる往相と他者を救うていく還相とを述べました。浄土真宗は、**浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。**

『教行証文類』教巻

と聖人がいわれるように、往相と還相があり、それはアミダの本願力のはたらき（回向）に依るという救済の教え、それが浄土真宗であるといわれるのです。この度は往相の道を中心に述べ、還相は簡単に述べました。全体についてなにか疑問の点があればおっしゃってください」

B「法蔵菩薩の願行とその成就の件なのですが、一切衆生を救いたいと願った法蔵菩薩は本願を建てる時に、法蔵菩薩ご自身の修行によって一切衆生が浄土に生まれなければ、ご自身が仏にはならない、いわゆる〈若不生者 不取正覚〉と誓われたにもかかわらず、まだ一切衆生が仏になっていないのにすでに十劫の昔に法蔵菩薩は仏（アミダ）になっておられるというのはなぜですか」

A「これについて簡単に申しますと、まず無量寿経に釈尊が説かれた法蔵菩薩の願行は物語であって歴史的な史実とはいえません。しかし、この願行の物語はアミダ仏の大悲のはたらきがいかに広大であり、私たちには大いなる恵みであるかを知らせる説話なのですね」

B「法蔵菩薩のこの物語を聞くと深く広大な大悲を感じるのですね」

A「ええ、私たちがアミダ仏の救いを聞く時、まずアミダ仏は一切衆生を救いたいと願われたという話を聞いて〈ああ私も救いの対象になっているのだ〉と聞いて大悲を感じ、また法蔵の願行は成就されているのを聞く時、〈まだ法蔵の願行の修行は成就しておらず、修行の途中ではなくて、すでに法蔵菩薩は一切衆生を救う力を成就してアミダ仏になり、今すでに万人に働きかけ、南無阿弥陀仏と喚びかけておられ、それが私の口に念仏となって現れ聞かせてくださっている、すなわち法蔵の願行は成就している〉と聞いて、〈ああ私はアミダ仏の救いの中に今すでにいる〉と聞かせていただくことになります。ですから本願の初めも本願成就の後も、どちらを聞いても〈私を助けたもうなさけ〉を知らされるのです」

B「法蔵菩薩の願行の物語にはアミダ仏の大悲心の広大なことが表されているのですね。ところで法蔵の願行のお話が単に物語に過ぎないなら、法蔵菩薩の願行成就による衆生の救いは現実の救いにはならないことになりませんか」

A「いいえ、アミダ仏と衆生は、もともと離れがたく一つであるという有り難い〈摂取不捨の真理〉の中にあるので

すね。ただそれをそうと知らずに、〈我あり、我が身あり〉と固執し、他（アミダ仏そして諸物）との関係に無知であり、摂取不捨のはかりない大悲のいのちのアミダ仏を無視しています。そしてその無知より起こる行い（業）とその結果としての憂苦の中に沈み込んでいるのが迷いの衆生の姿です。そこでこの摂取不捨の真理そのもののはたらきが一切衆生を救わんとしての大悲の活動としてはたらいてくださっていることを知らせんとして、仏陀釈尊がそのはたらきを物語の形で説かれたのが無量寿経に説かれた法蔵菩薩の願行とその成就のお話でしょう。それによって摂取不捨のはたらきがいかに広大な大悲であり、恵みに満ちていることが私たちに知らされるのです」

B「アミダ仏の救いは摂取不捨の真理のはたらきが元なのですね」

A「ええそうです」

B「次にアミダ仏の救いにあずかると私たちの罪悪の元は断たれ、浄土に生まれて仏になることができるといわれますが、アミダ仏に救われるとなぜ罪の元が断たれるのですか」

A「私たちの存在はアミダ仏のはかりないいのちのはたらきを離れては存在できません。そのアミダ仏のはたらきは人間の行いの善し悪しに関わらない恵みであり、それによって私たちは存在することができているのです。私たちが善い行いをするから生きていけるのでもなければ悪い行いをすると生きられないのでもありません。まず私たちははじめに存在が与えられている上でいろいろな善悪の行いをなしつつあるのです。その善悪の業の結果はいろいろ現れますが、私たちが今ここにいるという存在の事実は私たちの行いやその結果以前に、無条件に与えられている大悲のいのちの根本事実です。ですからこの事実そのものは私たちの善悪浄穢を超えていますし、それが私たちをして私たちたらしめている根本事実なのです」

B「善悪浄穢を超えているいのちによって私たちは存在しているという根本的な事実が先ずあるのですね」

A「ええ、アミダ仏に救われるとはこの事実に、私たちの行いや考え、業因業果に先立ってすでにこの事実に結びついていることに、私たちが気がつくことであり、それが〈摂取不捨にあずけしめられた〉という救いなのです」

B「その事実においては罪とその報いを超えているのですね」

A「ええ私たちは、自分の罪とその結果によってゆるぐことのない大いなるいのちの上に置かれているのです。いわば罪はそこでは消えているのです」

B「救われると苦はすべてなくなるのですか」

A「この世でアミダ仏の大悲に触れても業果としての身体はこの世の生が終わるまでは残り続きますから、身体があるかぎり寒熱や病苦などの痛苦はついてまわります」

B「人間の身体という業果としての形相（人の身）があるかぎり苦を受けるのですね」

A「ただ、この身が終わるとアミダ仏のはたらきそのもの、いわば純粋ないのちのはたらきそのものに帰一しますから、もはや業苦も業果もないアミダ仏のいのちと一つになって無窮の衆生救済のはたらきをさせていただくのだとお聞きしています」　（了）

【住職雑感】　昨年12月に、元外交官の塩尻宏氏より『アラビストの９年』という二００頁にわたる外交官生活のドラマチックな体験記を読ませていただいた。氏は主に中東諸国の大使館や領事館に勤務し、中東地域での外交現場で長年働いた人だった。私の知っている事件だけでも、日本赤軍のテルアビブでのテロ事件やリビアへの逃亡、イラクのクウェート侵攻、イライラ戦争、ホメイニのイラン革命、イラク戦争、アラブの春、それに日本の石油危機など枚挙にいとまがない。そういう中東の激動時代を経験し、日本国の要人はもとより中東諸国の多くの要人（アラファトやカダフィやファイサルなど多数）との接触を経験された。リビアでの特命大使を最後に退職されたのであった。ご夫妻は共にアラビヤ語に堪能で、奥様の和子さんは当時の美智子妃がヨルダンを訪問されたときに通訳をされた。氏はこの中東の激動期のまさに生き証人である。日本を背負っての業務は大変神経を使う仕事であり本当にご苦労されたと思う。このファイルで、外交官の仕事がどういうものかを大まかではあるが知ることができた。恥ずかしながらアラビア語が中東諸国の公用語だったことさえ知らなかった。また現地で日本人が亡くなると火葬習慣のないイスラム諸国で火葬場を探すのに苦労したとか、日本からのツアーが来て現地で重病人が出ると他の旅行者と添乗員は先に帰国するので、残された重病人の面倒を大使館の者がみて大変だった話なども印象的だった。

謹賀新年

真宗大谷派　念佛寺

（責役・総代）　土井紀明　中川政二
土井眞由実　吉田徳子
中村泰司

令和七年元旦